

目 次

おいでませ、秋の山口へ

第 11 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす (2) 地方における中東・イスラーム」のお知らせ.....	1
日本中東学会第 23 回年次大会研究発表者の募集.....	3
第 1 回日本中東学会奨励賞の実施について.....	4
第 2 回中東学会世界大会(WOCMES-2)参加報告.....	4
日本中東学会年報 (AJAMES) 編集委員会から.....	10
第 10 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす (1) 教育現場の中での中東・イスラーム」報告.....	10
資料・写真展『若きアフガニスタンの記録』 及び関連講演会の報告.....	11
地域研究企画交流センターの廃止について.....	12
NIHU プログラム「イスラーム地域研究」の発足.....	13
寄贈図書.....	15
2007 年度会費納入のお願い.....	16
事務局より.....	16

おいでませ、秋の山口へ

第 11 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす

(2) 地方における中東・イスラーム」のお知らせ

日本中東学会は、平成18年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費による補助を受け、去る7月25日、東京で開催した第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす (1) 教育現場の中での中東・イスラーム」を引き継ぐ形で、山口県、山口県教育委員会、JICA中国国際センター、山口県高等学校教育研究会社会部会を後援として、第11回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす (2) 地方における中東・イスラーム」を、以下の要領で開催いたします。

日時： 2006年11月18日(土) 午後1時～6時

場所： 山口市民会館小ホール(山口県山口市中央2-5-1)

(1) 講演「地方における中東・イスラーム：尾崎三雄氏の事跡を中心に」

臼杵陽(日本女子大学教授)

「第二次世界大戦中のイスラーム研究と日本」

清水学(元一橋大学教授)

「インド世界とアフガニスタン」

鈴木均(日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員)

「尾崎三雄の見たアフガニスタン」

(2) パネル・ディスカッション「日常のなかの中東・イスラーム」

司会：加藤博(一橋大学教授)

本講演会は、仕事のため中東で生活したり、あるいは中東から留学生や就業者を迎えたりと、日本と中東との接触が進む過程で蓄積されてきた、日常生活のレベルにおける中東・イスラーム関係の情報と知識を発掘することを目的としています。「講演」では、戦前1930年代に日本人農業技術者として初めてアフガニスタンに長期間滞在し、技術指導を行いながら、現地に関するさまざまな情報を集めて克明な記録を残した山口県出身の尾崎三雄氏の事跡に関する3つの講演を、「パネル・ディスカッション」では、中東を専門とする研究者と大学院生、山口県高校教員、山口県高校生をパネリストとして、私たちの日常における中東・イスラームとの関係について話し合います。

なお、本企画に連動して、高校生による研究発表会「山口から見た中東、イスラーム」を講演会当日(午前10時30分-12時)同じ会場で、また11月1日から26日まで防府市立防府図書館にて、尾崎三雄氏についての資料・写真展「若きアフガニスタンの記録 - 農業技術指導者尾崎三雄氏収集資料を中心に - (日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館と共催)を同時開催いたします。

皆様どうぞお誘い合わせの上、秋の山口・防府にお越しください。お待ち申し

上げております。

(企画担当理事 加藤 博)

日本中東学会第 23 回年次大会研究発表者の募集

すでに前号(107号)でご案内しましたとおり、日本中東学会第 23 回年次大会は、2007 年 5 月 12 日(土)・13 日(日)の 2 日間にわたり、仙台市青葉区の東北大学で開催されます。このたび実行委員会が会合を開き、参加申し込み、研究発表者募集などの詳細を確定いたしましたので、それをお知らせします。なお、同じ内容のものは学会ホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>)にも掲載されております。多くの方々が参加・発表をされることを期待しております。

1) 研究発表申し込みについて 締め切りをお忘れなく

ご希望の方は、12 月 10 日までに氏名、所属、発表題目(仮題可)、希望する使用機器(PC 用プロジェクタ、スライドプロジェクタ、OHP 等については台数に限りがありますので、とりあえずご希望をお教えください。できるだけ対応いたします)を大会実行委員会事務局(下記参照)まで、電子メールまたはファックスでご連絡ください。受領の旨お返事しますので、ご確認下さい。

なお、発表時間は 30 分、質疑応答は 10 分を予定しておりますが、発表希望者の数と会場の都合により、若干の変更が見られるかもしれませんので、その点をお含みおきください。

今後の予定としましては、12 月中に発表者の最終決定をし、1 月中旬に発表要旨原稿の依頼をします。要旨原稿の締め切りは 2 月末日です。そのときまでに要旨原稿の提出ならびに参加費支払いを済ませていない場合には、発表を取り消させていただく場合がございます。

2) 参加および懇親会申し込みについて できる限り前納をお願いします。

1 月中旬にお届けする予定の次号日本中東学会ニューズレターに、大会への出欠、懇親会、昼食弁当の申し込み等の書類とともに、郵便振替用紙を同封します。参加される方は同封の振替用紙をご利用の上、4 月 10 日までに払い込み下さい(研究発表希望の方の参加費申し込み締め切りは、上述のとおり、それより早く 2 月末日ですが、懇親会費、弁当代はあとで払っていただいてもかまいません)。

参加費は 1000 円、懇親会費は正会員 5000 円、学生会員 4000 円です。諸費用はできる限り前納をお願いします。

なお、託児所については検討中ですが、早めにお問い合わせ下さい。

日本中東学会第 23 回年次大会実行委員会事務局

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

東北大学大学院国際文化研究科

イスラム圏政治論（北川）研究室気付

E-mail: kitagawa@mail.tains.tohoku.ac.jp

TEL & FAX: 022-795-7587

（第 23 回年次大会実行委員長 木村 喜博）

第1回日本中東学会奨励賞の実施について

今年度の事業計画にありますように、日本中東学会奨励賞をスタートします。日本中東学会の若手会員の優れた研究成果の国際的な発信を奨励し、本学会の国際的な交流を促進することを目的とするもので、第1回は2005-06年に発表された外国語による論文を対象とし、07年5月の年次大会において授賞式を行います。奨励賞の実施規定については、秋の理事会で決定し、学会メーリングニュースおよびホームページでお知らせいたします。（会長 三浦 徹）

第 2 回中東学会世界大会(WOCMES -2)参加報告

事業報告

アンマン開催の第 2 回中東学会世界大会に、複数のパネルを組織し派遣するにあたり、会員からのパネル案公募を経て、理事会は全体案概要を決定し、国際交流基金による知的交流会議助成に応募することとした。申請時の予定事業は、5 パネル、3 部構成により、16 名の渡航を予定し、経費総額を 4,785,880 円、うち助成申請額を 2,578,200 円と見積もった。

結果として、基金からは 4 月 18 日付で総額 2,000,000 円の助成決定通知がなされ、その後のパネル構成の変更、発表の辞退と追加、宿泊費単価等削減により、実際には 4 パネル、3 部構成により、19 名が派遣され、事業経費総額は約 4,350 千円（9 月 30 日事業完了に伴い、原稿執筆時点で精査中）となった。

今次の助成は、学会としては2年ぶりのこととなるが、特筆すべきは会員を代表者とする科学研究費補助金による事業等を有機的に取り込んだ点であり、これにより従来にはない大規模な派遣が可能となった。

(国際交流委員会 赤堀 雅幸)

WOCMES パネル報告

1. Study of Rural Societies from Multi-Perspective Views : Case of Egypt

本パネルは、次の4つの発表から構成された。

(1) Hiroshi KATO and Erina IWASAKI (Hitotsubashi University) , Attempt of Linking Two Approaches: Household Survey and GIS - Residential pattern of rural migrants on the edge of Greater Cairo

(2) Hirofumi TANADA (Waseda University), Regional Diversity in Urban-Rural Relationship

(3) Hiroshi KATO and Erina IWASAKI, Abu Senita: A Community Study of a Village in Lower Egypt

(4) Mohamed Abdel Aal (Cairo University), Tenants and Land Owners: A Struggles for Land and Rights

パネルの目的は、異なる性格のデータや情報を駆使することによって、ともすれば水利社会としての等質性や中央集権性が強調されるエジプトの画一的な社会像を壊し、多様な地域からなる複合社会として、エジプト社会を分析する視角を探ることであった。第1発表は、パネルの序論として、エジプト社会を分析するためのデータや情報、とりわけ世帯調査によるミクロ・データ、人口を中心としたセミマクロ・データ、地理情報の3つをGISで結合することの有用性について論じた。第2発表は、カイロの同郷組合データを使って、マイグレーションを介した多様な農村・都市間関係におけるいくつかのパターンを指摘した。第3発表は、農村での聞き取り調査のデータと情報をもとに、近年における土地賃貸借法が農民の土地保有に与えた影響を、地域の差異に注目して分析した。第4発表は、世帯調査によるミクロ・データと地理情報に基づき、村民の家族構成、婚姻関係、家族居住パターンに焦点を合わせて、下エジプトと上エジプトの農村構造の違いを分析した。4つの発表は、パネルの目的と趣旨をよく理解し、お互いによく関係づけられていた。

(加藤 博)

2. The Logic of Succession around Sufis and Saints

10年目を迎えた「スーフイズム・聖者信仰・タリーカをめぐる研究会」は、4

年前にマインツで開かれた第1回大会に引き続き、今回もパネルを持つこととした。テーマは「スーフィーと聖者をめぐる継承の論理」で、オーガナイザーは赤堀雅幸・東長靖の両名がつとめた。パネルは、合計7本の発表と2つのコメント、総合討論から成り立っており、タリーカのシャイフ位の継承に関わる発表3本、広い意味での聖性の継承に関わる発表4本を組み合わせたこととした。継承にまつわる諸相をあぶり出し、問題提起を行うことができたと思う。今回のパネルは、スーフィズム・聖者信仰・タリーカに関する共同研究を我々に先んじて進めてきたフランスの研究者たちと、全面的に協力することでより実り多いものとなった。第2回大会には、全部で3種のスーフィズム関係のパネルがあったが、他の2つのパネルからも積極的な参加を得ることができた。本パネルで発表された論文は、これまでに本研究会が開催してきた幾度かの国際会議におけるペーパーと合わせて、欧文オリエントと『アジア・アフリカ地域研究』に特集企画として公表される予定である。

Presentations:

- (1) Kazuo MORIMOTO (The University of Tokyo), "And I Saw the Prophet in a Dream": Anecdotal Admonitions to the Believers in Manaqib-Fada'il Literature on Sayyid-Sharifs
- (2) Tatsuya NAKANISHI (Kyoto University), Creating the Silsila, or the logic of succession, in the case of Chinese Muslims
- (3) Alexandre PAPAS (EHESS-College de France), The Succession of Naqshbandi Shaykhs in Premodern Central Asia: Controversies and Changes
- (4) Kei TAKAHASHI (Sophia University), Divisions within the Tarīqas in Modern Egypt: A Case of a Conflict over the Independence of al-Habībiyya from al-Rifā'iyya (1905–1925)
- (5) Thierry ZARCONE (CNRS), Shaykh Succession in Turkish Sufi Lineages (19th and 20th century): Conflicts, Reforms and Transmission of Spiritual Enlightenment
- (6) Sachiyo KOMAKI (Takasaki City University of Economics), Politics, Poetics and Pop in the Succession of Holy Relics: Examples from South Asian Muslim Society
- (7) Masayuki AKAHORI (Sophia University), The Transformation of Saintliness in the Process of Succession: Saints and their Descendants in the Western Desert of Egypt

Discussions:

Akira GOTO (Toyo University)

Eric GEOFFROY (Universite Marc Bloch)

Chair: Yasushi TONAGA (Kyoto University)

(東長 靖)

3. New Trends in Middle Eastern and Islamic Studies from East Asia

本パネルは臼杵がオーガナイザーとなり、「東アジアの中東イスラーム研究の新たな潮流」というテーマのもと、6月14日午後アンマン・メリディアン・ホテルで行われた。報告者は5名予定されていたが、岡本久美子氏が急病のため出席できず、4人の報告となった。まず佐藤次高氏は「日本における新たなイスラーム地域研究」と題して、新たに再開された5年間のプロジェクトについて、李氏は9・11事件を契機として韓国で組織された大規模な中東地域研究プロジェクトについて、三浦徹氏は主にアンケート調査をもとに日本における中東・イスラーム研究と教育について、モジュタバ・サドリア氏はポスト・サイードにおける知的構築に関して知識人の役割はいかにあるべきかを提言する報告を行った。各報告後、フロアーに開いて質疑応答が行われたが、東アジアが中東イスラーム研究で果たすべき役割を再考する絶好の機会となった。

Presentations:

- (1) Tsugitaka SATO (Waseda University), New Islamic Area Studies in Japan
- (2) Hee Soo LEE (Hanyang University), The 9/11 Events and New Research Projects on Middle East Area Studies in Korea
- (3) Toru MIURA (Ochanomizu University), A Comparative Study of Asia: Interactive Understanding of Islam and Middle East in Japan
- (4) Mojtaba SADRIA (Chuo University), Post-Said Knowledge Construction: Margin's Impact
- (5) Kumiko OKAMOTO (Osaka University of Foreign Studies), The Picture of Harun al-Rashid and his Palace: From the Thousand and One Nights

Chair: Akira USUKI (Japan Women's University)

(臼杵 陽)

WOCMES アンマン大会参加記

アンマンを訪れるのは89年以来17年ぶり、空港からホテルに向かう途中、大渋滞にあい、急激な変貌に驚かされた(都市開発は独立採算の第三セクターが担当しているという)。6日間にわたる大会は、メリディアンホテルとマリオットホテルを主会場として、特別企画は王立文化センターや市ホールなどで行われた。プログラムはカラー印刷で、165のパネルと特別企画が載っている。パネルは2時間単位で、企画パネルと個別の発表者をあつめた一般パネルの2種類があり、このあたりは、北米中東学会(MESA)や第一回WOCMESのやり方を踏襲し、映画祭やブックフェアも平行して行われた。前回同様に英語または仏語が使用言語であったが、発表タイトルの99%は英語で、質疑でアラビア語が用いられる

場面もあった。

日本からは、JAMES 企画の 3 つのパネル、同志社大学一神教研究センターによる「日本における中東研究の現況」(企画者: Samir Nouh、発表者: 菅瀬晶子、中村明日香、イドリース・ダニシュマズ)のパネルのほか、武石礼司、秋葉淳、森山央朗さんらが研究発表を行った。エジプトやシリアに留学中の大学院学生たちが大挙して参加していたことも目をひいた。

パネルは現代をテーマとするものが目立ち、とくにパレスティナ問題、湾岸研究、ジェンダーのパネルが多く、これに比べて、近代以前の歴史や文学・思想に関するものは数えるほどしかなかった。朝 8 時半から夜 18 時半までパネルがあり、私自身は 5 日間で 22 のパネルをはしごした。総じて、現代政治もしくは著名な研究者が発表するパネルが盛況で、逆に出席者が 10 人以下というパネルも珍しくなかった。大会参加者は計 1200 人というがエクスカージョンにでる人も多かったのだろう。発表内容は玉石混淆で、大学院博士課程ないし PD といった若手研究者の発表が意外に多く、その道の先達から厳しい質問にあうという光景もみられたが、我々も国外でもまれる必要があるだろう。「米国のカレッジでの中東教育」というパネルでは、中東教育の教材を掲載するウェブサイトやテレビ会議システムを用いた討論形式の授業などが紹介され、いま中東をいかに教えるかが共通課題であることを感じた。

特別企画では、主催者である王立宗教間研究所 (RIIF) 所長でアンマン大会会長であるハサン・ビン・タラール殿下の講演会がおもしろかった。「中東の未来へのヴィジョン」と題する講演では、植民地主義、シオニズムからネオナショナリズムの時代に移行しつつあるとしながらも、だからこそ、多元的なヒューマニズムの思想と運動が必要とされていること、地域間のヒューマニズムにもとづく連携関係が重要性を帯びるとのべ、そこでヨルダンの役割が大きいことを示唆した。質疑応答では、1 時間以上にわたって 10 人をこえる人々の質問に丁寧に答え、シューラーを思わせた。終了後、ハサン殿下に握手をもとめる人ばかりができ、私もその列に加わった。第二回 WOCMES 賞は、日本にも来日した歴史研究者アンドレ・レイモン氏 (フランス) に授賞され、期間中に開催された WOCMES カウンシル (JAMES では東長靖会員がメンバー) では、次回は 4 年後に開催することとし、主催地の立候補を待っているという。(三浦 徹)

大会参加記

JAMES 第 1 パネルのピンチヒッターとして、急遽、第 2 回中東学会世界大会に参加することになり、ワールドカップ日本 vs オーストラリア戦の朝にアンマンに到着した。強引に客引きをしない空港タクシーの運転手のおとなしさに違和感

を覚えながら、都心に向かった。車中のラジオからアラビア語で「日本」と連呼されるのも不思議な感覚であった。市内に向かう周辺の景色は、上空から見た乾いた風土そのものであったが、道路の両側に植えられた低灌木の赤い花が一層その興味を増していた。次第に姿を現してきたアンマンで私の目に飛び込んできたのは「アラブ銀行」の大きなサインであったのが、ヨルダンを象徴しているようでもあった。アンマンは標高 800 メートルほどの高地にある都市で、2006 年 1 月に再訪したアンカラと少し空気が似ているようにも思われた。

アップタウンにある報告会場は、メリディアンとマリオットの 2 つのホテル(徒歩 5 分ほどの距離) 後者の会場は少数の発表会場のみで参加者はもともと少なかったが、主会場のメリディアンも全体で 1300 人という参加登録者の数から見ると報告会場への参加者はかなり少ない印象であった。別会場で映画をはじめ種々のイベントが開催されていることも原因と思われるが、全体として良い意味で学会臭さがなく国際交流の意義が前面に出た会議であり、そのような場として大会が利用されていたことも感じさせた。他方で一部を見ての印象となるが、会場により学術発表としてのプレゼンテーションの質は落差が大きく、疑問を感じることもあった。各報告にペーパーなどが準備されていないことも、聴衆には不親切であったが、運営主体の大会に対する考え方がわれわれとは違うということであろう。

今回の大会では、シリアやエジプトなど近隣諸国に留学中の若い日本人研究者が大挙して参加していたことも印象的であった。時代が変わったというのが私の正直な感想であるが、国際交流基金の研究助成や現地留学の機会が増加したことなどを考えれば当然すぎることもかもしれない。研究テーマや専門など夕食の席などで尋ねてみたが、あまりの多彩さに覚えきれなかったほどで将来の日本における中東研究の発展可能性がうかがわれた。とはいえ、研究テーマの偏りがあるような気もしたが、偶々そうならただけかも知れない。

一方、JAMES が主催したパネルは一定数の聴衆を集め、日本や東アジアにおける中東研究に対する海外からの関心の高さを感じ、議論も活発であったが、私が参加したパネルはやや寂しい印象が残った。パネルの内容が影響したとも思えないのだが、聴衆にアピールするパネルを設定することの難しさを実感した次第である。とはいえ、このパネルにはヨルダンの元外相カーミル・アブー・ジャーベル博士をはじめ、数人のヨルダン人研究者が最後まで熱心に参加してくれたが、発表終了後に懇談する機会を持てなかったのが残念であった。今後の大会参加を考慮すれば、率直な意見交換の機会を持つべきであったと個人的には反省している。大会参加を決めたのが開催 1 ヶ月前、発表準備に 2 週間をかけて、実質わずか 4 日間の滞在という強行軍であったが、アンマンのアップタウンとダウントウンを堪能し、ヨルダン渓谷の風を感じて死海の水を味わい、丘の上になびくヨ

ルダンの巨大な国旗が印象に残った出張であった。貴重な機会を与えて頂いた日本中東学会に感謝したい。

(店田 廣文)

日本中東学会年報 (AJAMES) 編集委員会から

1. 22-1号が出版されました。

2006年8月に本年度1冊目の年報(第22-1号)が出版されました。論文3本、研究ノート1本、書評2本のほか、特集として4名の著者による Muslim Discourses on Otherness and Selfhood(取りまとめ:八木久美子会員)を掲載しています。本号の欧文・和文の比率はほぼ2対1で、欧文比率が高いのが特徴となっています。すでに9月初旬にお手元に届いているかと思いますが、感想・ご意見などがございましたら、ajames-editor@tufs.ac.jp までお寄せいただければ幸いです(なお、雑誌の送付は2006年度会費納付済みの方に限らせていただいております。ご不明の点は、学会事務局までお問い合わせください)。

2. 次の締め切りは12月20日です。

去る6月20日に投稿を締め切った第22-2号には、14名の会員の方から論文・研究ノートの投稿をいただきました。多数のご投稿ありがとうございました。編集委員会では現在、鋭意、査読・編集作業を行っており、本年12月の刊行を目指しています。ご期待ください。

つづく次々号(第23-1号)は、2007年6月刊行予定です。現在、次々号への投稿を受け付けております。締め切りは12月20日です。論文、研究ノート、書評の各ジャンルへの投稿をお待ちしております。投稿規程は学会ホームページよりダウンロードすることができますので、ご利用ください。

このほか、年報には「中東研究博士論文要旨」を掲載しております。博士論文を執筆された皆さん、あるいは指導に当られた先生方からの情報提供をお待ちしております。ご協力のほど、よろしく願いいたします。

(日本中東学会年報(AJAMES)編集委員長 林 佳世子)

第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす

(1) 教育現場の中での中東・イスラーム」報告

2006年7月25日(火) 14:00-18:00、明治大学アカデミーコモン会議場において、「日常のなかに中東を掘り起こす(1) 教育現場の中での中東・イスラーム」と題された、日本中東学会第10回公開講演会が開催された。その目的は、われわれの生活の身近なところにある中東・イスラームとの関係を掘り起こすことで、私たちの中東・イスラーム認識を洗い直すことにあり、そのために、日常生活のレベルにおいて、新聞やテレビやインターネットあるいは学校教育を介する中東との接触のなかで蓄積されてきた情報・知識を取り上げ、これらの情報・知識とわれわれの中東・イスラーム認識との関係を検証することであった。

内容は、「イラク：ニュースのむこうになにを見るか」と題された酒井啓子氏(東京外国語大学大学院地域文化研究科教授)の講演と、中東研究者、教員、報道やNPOの関係者が集まり、身近な中東関係の情報と知識を発掘・検証しながら、学校教育における中東・イスラームの姿について考えたパネル・ディスカッション「報道と教育の現場から」とから構成された。後者では、松本高明氏(東京都立豊島高等学校教諭)が「高校教育から」と題して、アンケート調査に基づく高校生のイスラーム観の分析結果について問題提起したほか、三浦徹氏(お茶の水女子大学文教育学部教授)が「大学・研究の場から」、川上泰徳氏(朝日新聞編集委員)が「報道から」、田中好子氏(NPO パレスチナ子どものキャンペーン事務局長)が「国際支援活動から」、それぞれ当該テーマについての報告を行った(司会は加藤博一橋大学大学院経済学研究科教授)。参加者も、ウィーク・デイにもかかわらず多く、フロアからの質問や意見も活発に出され、盛会であった。アカデミックな組織が主催して、立場を異にする教育、報道、NPO関係者が自由に意見交換をするはじめての試みであり、今後の同種の企画を実施する際に参考とすべき貴重な示唆に満ちていた。(加藤 博)

資料・写真展『若きアフガニスタンの記録』及び関連講演会の報告

日本中東学会は日本貿易振興機構アジア経済研究所と共催で、2006年7月5日(水)から8月1日(火)まで日本貿易振興機構ビジネスライブラリー内で資料・写真展「若きアフガニスタンの記録 - 農業技術指導員尾崎三雄氏収集コレクションを中心に -」、また7月18日には同会場で開催講演会を開催した。資料・写真展では尾崎氏のフィールドノート10冊、アフガニスタンでの収集資料(新聞、雑誌、教科書等)、写真資料(パネル54枚、写真ファイル13冊250枚)に加え、アジ研図書館所蔵のアフガニスタン関係書籍約500冊を展示公開した。開催日数は20

日間で来館者数は約 170 名、アンケートによると満足度は 75%と高く、これまで知られていなかった当時の対アフガン関係や農業技術指導の実情などを垣間見るとよい機会になった。

また関連講演会は、鈴木均氏が「尾崎三雄のアフガニスタンにおける足跡」、臼杵陽氏が「日本における回教圏政策の原点」という演題で講演を行った。鈴木氏は尾崎の戦前のアフガニスタン研究とその現代的な意味をめぐって、彼のフィールドノート、日記などを紹介しつつ徹底した記録主義という研究方法上の特色、当時の時代背景を説明し、現代の地域研究者がどう継続・発展させていくべきかといった問題を提示した。また臼杵氏は、尾崎がアフガニスタンに滞在（1935～1938年）した時代における日中戦争期の日本の回教研究体制と回教圏政策の形成の流れを当時の回教問題に関する刊行物を紹介しながら概観し、当時の国際関係におけるアフガニスタンの位置づけについて語った。参加者は 33 名で、ほとんどが一般参加者であった。これまで知られていなかった戦前・戦中期の回教圏政策や、戦前期にアフガニスタンと深くかかわった日本人の話がとりわけ新鮮だったようで、終了後のアンケート調査からも、今回の催しは成功裏に終わったといえよう。ご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げたい。（泉沢 久美子）

地域研究企画交流センターの廃止について

大学共同利用機関法人人間文化研究機構・国立民族学博物館（略称・民博）に附設されておりました地域研究企画交流センター（略称・地域研）が 2006 年 3 月 31 日をもって廃止されました。私自身、地域研が設立されて半年経過した 1995 年 4 月に赴任して 2005 年 9 月までその一員であり、その後廃止までは客員教員でした。したがって、地域研の廃止に関してあくまで個人の立場から日本中東学会との関係に重点を置いてご報告したいと思います。

さて、周知のように 1973 年に第 4 次中東戦争が勃発、石油ショックが日本社会に強い衝撃を与えました。そのような状況を受けて梅棹忠夫・元民博館長を団長とする文化ミッションが中東諸国に派遣されて「国立中東研究所」設立の提案がなされました。その後、1985 年 4 月に日本中東学会が設立され、梅棹氏が初代会長、板垣雄三氏が初代事務局長に就任されました。さらに日本中東学会では「地域研究推進のための国立共同利用機関設置要請決議」（1990 年 4 月、年次大会総会）がなされました。そして紆余曲折を経て地域研が 1994 年 6 月、松原正毅・学会元理事をセンター長として民博に附設されて発足しました。

地域研は約 11 年 9 ヶ月の短い歴史ではありましたが、2001 年のいわゆる「9・11

事件」をはさんで、まさに中東イスラーム研究にとっても激動の時期に活動を行いました。この間、イスラーム地域研究（1997～2002年、プロジェクト・リーダー 佐藤次高・元会長）も実施され、地域研は研究班3「イスラームと民族・地域性」（班長 加藤博・元会長）として同プロジェクトに参加しました。さらに小杉泰会長時代の2003年度から2年間、地域研は学会事務局（臼杵陽事務局長）を引き受けました。また、2004年4月には地域研究コンソーシアムが設立、日本中東学会も加盟して、地域研にはコンソーシアム事務局が置かれました。

地域研廃止に伴って、日本における地域研究をめぐる状況は大きく変わろうとしています。旧地域研の現員9名は2006年4月に京都大学に新設された地域研究統合情報センターに異動し、また人間文化研究機構内には「地域研究推進センター」が設立されて「イスラーム地域研究推進事業」が新たに開始されました。さらに文部科学省による「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の公募が行われ、中東に関する2つの研究課題が採択されています。（臼杵 陽）

NIHU プログラム「イスラーム地域研究」の発足

「イスラーム地域研究」は、各地域の個性とイスラームとの係わりを検証し、多様なディシプリン研究を活用することによって現代イスラームの理解をさらに深めることをめざします。具体的には、人間文化研究機構（National Institutes for the Humanities-NIHU）が実施する地域研究推進事業として、早稲田大学（中心拠点）と東京大学、上智大学、東洋文庫、京都大学（2007年度から）における研究拠点の形成と、これらを拠点とするネットワーク型の共同研究が実施されます。

21世紀に入ると、同時多発テロ（2001年9月11日）をかわきりに、米英軍の空爆によるターリバーン政権の崩壊や同じ米英軍の侵攻によるフセイン政権の崩壊など、世界を揺るがす重大事件が相次いで発生しました。これらの事件や戦争の背後には、「イスラームのグローバル化と先鋭化」という事実が存在します。21世紀における世界の動向、石油資源の問題、地域紛争の性格などを正しく理解するためには、この新しい現実をふまえたうえで、イスラームと各地域社会との関係を実証的に明らかにすることが不可欠です。本プログラムは、「イスラーム地域研究」プロジェクト（1997-2002年）を継承し、これをさらに発展させることによって、日本におけるイスラーム研究・教育の拠点形成をめざします。各拠点の共通課題は以下の通りです。

1. 現地の研究者を含む国際的な共同研究を実施し、「他者」と「当事者」双方の目を通して「イスラームと地域」の係わりを分析することにより、現代イス

ラーム世界について実証的な知の体系を築く。

2. 各研究拠点における研究の基盤となる文献資料を収集、整備し、前プロジェクトで開発されたアラビア文字による情報検索システムを整備して、蓄積された史資料のデータベース化、史資料利用の全国化・国際化をさらに促進する。
3. 国内・国外の若手研究者が本イスラーム地域研究へ参加することを積極的に奨励し、国際的な活動を通じて次世代のイスラーム研究を担う若手研究者を養成する。

以上の趣旨をご理解いただき、自薦・他薦で多くの方々に参加していただければ幸いです。個人研究と共同研究との折り合いをつけながら、10年、20年と息の長い研究を継続したいと思っております。イスラーム研究に新しい時代が到来することを予感しながら、国内・国外の皆様にも前向きのご協力をお願いする次第です。

<研究組織と研究プロジェクト>

1. プログラム代表者：佐藤 次高（早稲田大学）
2. 中心拠点：早稲田大学イスラーム地域研究所・現代イスラーム地域研究センター
「イスラームの知と文明」拠点リーダー：佐藤 次高
イスラームの知と権威 代表者：湯川 武
アジア・ムスリムのネットワーク 代表者：桜井 啓子
3. 拠点1：東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター・イスラーム地域研究部門
「イスラームの思想と政治」拠点リーダー：小松 久男
中央ユーラシアのイスラームと政治 代表者：小松 久男
中東政治の構造変動 代表者：長沢 栄治
拠点2：上智大学アジア文化研究所・イスラーム地域研究拠点
「イスラームの社会と文化」拠点リーダー：私市 正年
イスラーム主義と民衆運動 代表者：私市 正年
東南アジア・イスラームの展開 代表者：川島 緑
スーフイズムと民衆イスラーム 代表者：赤堀 雅幸
拠点3：財団法人東洋文庫・イスラーム地域研究資料室
「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」 拠点リーダー：三浦 徹

なお、事業・研究計画の詳細については、人間文化研究機構のホームページ

(<http://www.nihu.jp/recruit/islam.html>)から、「イスラーム地域研究推進事業基本計画」「イスラーム地域研究研究計画」がダウンロードできます。また、拠点ごとにホームページを開設し、研究活動の予定や報告を掲載していく予定です。

(佐藤 次高)

学会への入会を希望される方は、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームをダウンロードできます。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

寄贈図書

【単行本】

小杉泰・江川ひかり編 『イスラーム 社会生活・思想・歴史』新曜社、2006.

リバーベンド著、リバーベンドブログ翻訳チーム訳、酒井啓子解説 『バグダッド・バーニング2 いま、イラクを生きる』アートン、2006.

Patrice Cressier, Maribel Fierro, Luis Molina (ed.), Los Almphades: Problemas y Perspectivas volumen I, II, Madrid, 2005.

【逐次刊行物】

Newsletter, No.69, Istanbul: O. I. C. Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2006.

『季刊アラブ』 vol.118、日本アラブ協会、2006.

2007 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。年次大会の折に 2007 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方には、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙を同封させていただきましたのでご利用ください。2006 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払いください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

なお、来年 1～2 月に予定されております本学会 2007/2008 年度（第 12 期）役員選挙にあたり、2006 年度会費納入をもって有権者資格が得られることになっておりますので、ご注意ください。

事務局より

A A 研が学会事務局を担当する期間も、残すところ、はや半年を切りました。もっとも、山口での公開講演会、新設された日本中東学会奨励賞の選考サポート、次期役員選挙の実施、会員名簿情報の調査・発行、はたまた来年度年次大会開催準備のサポートなどなど、残る半年も事務局にとってはビッグイベントが続きます。今後とも会員の皆さまのご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（飯塚 正人）

・恒例の秋の公開講演会は今年、山口市民会館で 11 月 18 日(土)に開かれます。ちょうど紅葉の美しい季節、豊富な秋の味覚に恵まれる季節です。近隣にお住まいの方々はもとより、たくさんの学会員のご来場をお待ちしております。

・来年度年次大会報告者の募集が始まりました！応募方法・締切等については本ニューズレター 3 ページをご覧ください。

・2007/2008 年度（第 12 期）役員選挙は来年 1～2 月に実施の予定です。1 月中旬発行予定の次号ニューズレターに 2007 年 1 月 1 日現在の暫定有権者名簿を同封いたします。なお、有権者は 2006 年度会費を納入した正会員となりますので、2006 年度会費未納の方はできるだけ早くご納入ください。

日本中東学会ニュースレター 第 108 号

発行日 2006 年 10 月 19 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所
飯塚正人研究室気付

TEL & FAX 042-330-5543

E メール：james@aa.tufs.ac.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>

郵便振替口座：00140-0-161096

銀行口座：三井住友銀行渋谷支店

普通 No. 5346808